

ご あ い さ つ

沖縄県衛生環境研究所長 仲宗根 一哉



所長 仲宗根 一哉

平成30年4月1日付けで所長に就任いたしました。衛環研ニュースの紙面を借りてご挨拶申し上げます。

当研究所は、平成29年4月に南城市大里からうるま市兼箇段に移転してまいりました。新庁舎

は、敷地面積約14,000㎡、地上2階建て延べ床面積は約5,900㎡となっており、研究内容に応じた、厳重なセキュリティを確保するとともに、必要とされる最新の検査機器を配備した、光あふれる、近代的な研究施設となっております。

当研究所では、これまで、①試験検査、②調査研究、③研修教育、④公衆衛生情報等の収集・解析・提供の4つの基本的な機能により、県民の公衆衛生の向上、並びに環境の保全に努めてきたところでありますが、今後は4つの機能の更なる充実を図るとともに、複雑化・多様化する健康危機事例に迅速かつ的確に対応するため、健康危機管理の科学的かつ技術的拠点としての機能を充実強化することとしています。

さて、沖縄県内では、本年3月に麻しん患者が4年ぶりに発生、その後相次いで感染が確認されました。当研究所では、迅速に検査体制を敷き、衛生生物班感染症グループを中心に、連日持ち込まれる検体の遺伝子検査を長期にわたって実施しました。同様の感染症発生事例は今後も起こりうる可能性があります。当研究所としましては、検査体制を更に充実させるとともに、検査結果を関係機関に迅速に提供することができるよう努めてまいりたいと考えております。

当研究所は、こうした感染症発生時に検査機関として重要な役割を果たす一方、本県特有の問題にも対応しなければなりません。亜熱帯地域である本県では、サンゴ礁という豊かな自然環境があります。陸域からの赤土等や栄養塩など人為的な汚濁負荷の増大に伴うサンゴ礁生態系への影響、

サンゴ礁域に生息する毒化した魚類を食べることによって起こる、「シガテラ」と称される食中毒、更にハブクラゲやアンボイナなどの海洋危険生物による健康被害など、サンゴ礁域における様々な問題について当研究所では調査・研究を行っております。また、陸域に関しては、県内には危険な毒蛇が4種類生息しており、毎年60件前後の咬症事例が発生しております。当研究所では、平成7年度から副作用のリスクが極めて少ない「抗ハブ毒ヒト型抗毒素」の研究を進め、安全で効果が高いヒトモノクローラル抗体による治療用抗毒素の研究開発を進めているところです。

計画的な調査・研究以外に、事故時の調査があります。近年、沖縄県では、在沖米軍の訓練等に伴う事故事例が頻発しており、昨年10月に米軍ヘリCH53Eが東村で不時着炎上した際に、当研究所では、原子力規制庁の協力を得て、ヘリに装着されていた放射性物質のストロンチウム90の影響がないか、周辺環境および事故現場において分析用土壌採取や放射線の測定を実施しております。

そのほかにも、O-157等による大規模食中毒の発生、地球温暖化に起因する新たな保健衛生上の問題、原発事故に伴う放射能問題、PM2.5のような広域的な環境問題など、県民の生命を脅かす様々な事態の発生が懸念されており、衛生環境研究所の担う役割はますます増大しております。

また、公衆衛生情報の収集・解析・提供について、当研究所内には「がん登録室」と「感染症情報センター」を設置しており、それぞれ県内におけるがんの登録と追跡、統計資料の作成およびその活用と提供、感染症情報のデータ収集および提供を行っております。

最後に、当研究所は、公的研究機関として、今後も様々な健康危機管理事案や環境問題に迅速かつ的確に対応するとともに、県民や関係機関に科学的な情報を積極的に発信するなど、各種行政施策の推進に職員一丸となって取り組んで参ります。各位の一層のご理解、ご支援、ご協力を今後ともよろしくお願いいたします。